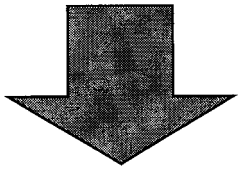
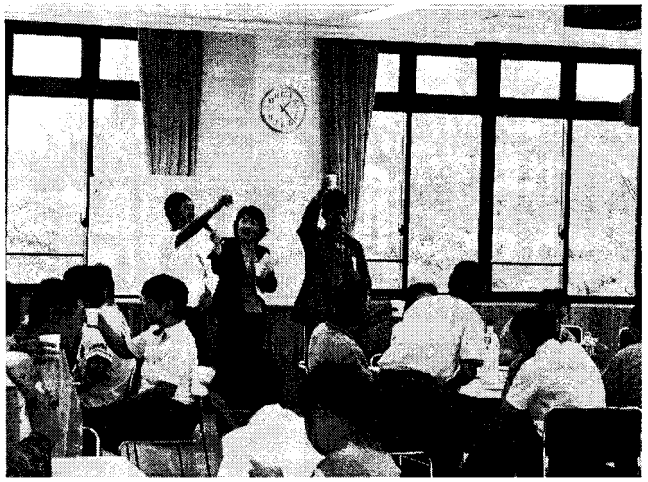
グループホーム支援
・・・余暇への支援

コミュニティー機能を活用する



・土日の活動にこそ、地域生活支援の醍醐味
・娯楽・買い物等だけが余暇ではない
・〇〇教室・〇〇サークル等の活用
・サービス調整役は世話人・生活支援ワーカー

アフターフォロー



◎訪問

（西駒郷地域生活支援センター　地域移行推進部　各寮支援員等）

- ・1月以内に1回
- ・概ね年2回
- ・特別な課題がでれば、関係機関と連携し、ケア会議等開催

◎移行者の交流会（3回実施）

◎移行した方の家族にアンケート調査

◎地域生活移行の検証

移行過程で浮かぶ様々な課題

福本弘『女』@風の工房

- やっと夢が実現できる
  - ・・・・不安と期待が一気に襲いかかる
  - 心の中で制御できないものが襲う
  - → 移行期外傷・・・カウンセリングが有効の場合も
- 未知の暮らしへの不安を解消する手段
  - → 入所施設の垢を落とす・・・自活訓練が有効
- グループホームに暮らすことで、自由になった
  - → 移行初期に集中的な支援体制
- 早急な整備・様々な団体の参入（GH運営ノウハウ不足）
  - → 研修会を圏域単位で・出前講座
- 検証の必然性
  - 第三者による検証が必須
  - → 公平性・透明性・信頼性 →汎用化

信濃毎日新聞　2006.12.26

長野で障害者の自立考えるフォーラム

地域で生活 本人の声

「西駒郷」から移った体験を発表

障害があっても、施設でなく、住み慣れた地域で暮らしたい。「ながの障害者地域で暮らすというとフォーラム」が、県内でつくる実行委員会が今月、二日間にわたって長野市の県庁で開いた。県内の知的障害者総合施設「西駒郷」（駒ケ根市）、「伊那郡宮田村」で、入所者の「地域生活移行」が進む中、地域のグループホームなどに移った三人が体験を発表、本人の目線から見た援助のあり方を考えた。

「一人で自由にテレビが見られます。十一時ごろまで見ています。金曜だけ、缶ビール一本飲みます。一緒に暮らす四人で買って来ます。夕飯の時、ほかの日生きと語った。

ステージに立った人は近況を話した。

今回のフォーラムでは、西駒郷に入所した当事者の中に、大勢の人が選択肢があることができた。同じ障害者、障害者の権利擁護に取り組む大阪府立大学助教授、三田優子さんが務めた。

人間さんは二十二年間過ごした西駒郷を出て、駒ケ根市内にある定員四人のグループホームへ移った。現在、就職先を探しながら西駒郷の「作業部」に通っている。週末、小遣い金持ってカラオケ店に出掛けるのが楽しみという。

三田優子さんは西駒郷で四人部屋にいた。プライバシーのない集団生活、県が入所者対象に行った意向調査に「一人で暮らしたい」と希望を伝えた。二〇〇四年七月、上伊那郡宮田村の村営住宅にようやく「自分の城」を持った。

昼間は通所で織物製品を作り、アフターファイブは「楽しい」などと夢を語る人も多かった。「息が詰まるよう村内の婦人サークルに参加。二近所付き合いを楽しんでいる。

◇

県の聞き取り調査では、言葉で意思表示できない人の約八割、二百四十二人が移行を希望。〇三年度の調査で上千四人が移行、入所者は三百四十四人に減った。

西駒郷の職員は一九六八年。当時は住まわ福祉サービスがそして、嘱託職員の仕事を通じて家族がまかった。本人の思いとは無関係に入所が決まったケースも多かったという。

入所年数が三十八年にわたった松本市出身の三田は現在、長野市内で地域障害者に携わっている。「好きなことを、自分のペースで、自分のペースで」と強調した。

地域移行が進む一方、移行先で、新しい人間関係に悩んだり、家族以上に管理的な生活を強いられたりしているケースもある。三田さんは、「ホームでは『風の子』と呼ばれ、『はい、本当はね』と言った。

三田さんら研究者、大学院生ら五人のチームは今年三月、日本財団の助成金を得て西駒郷地域移行の検証事業に着手。十二月末までに移行者のうち百二十人のホームなどを訪れ、援助者とのかかわりや将来の希望、悩みなどを尋ねてきた。

中には「施設に連れ戻しに来たの」と間違いし目撃に隠れた人もいたが、「結婚したい」「次は一人暮らし」などと夢を語る人も多かった。「息が詰まるよう な集団生活の中で夢を語えるんできた」と検証チームの山梨学院大学講師、竹端寛さん（三）は話す。あきらめや困惑への満足もあった。「花開いたかのように、どっと出てきた」

◇

県内では、知的障害者の「暮らし」が西駒郷によって、まっすぐ、ほかの居住入所施設でも始まっている。

北信圏域障害者支援センター（中野市）所長の酒岡秀さんは、理解度を上（関係者、機関が）同じ目線で動ける点は少ないが、長野県では障害者の事業者、市町村が一致協力してくれた」と強調した。

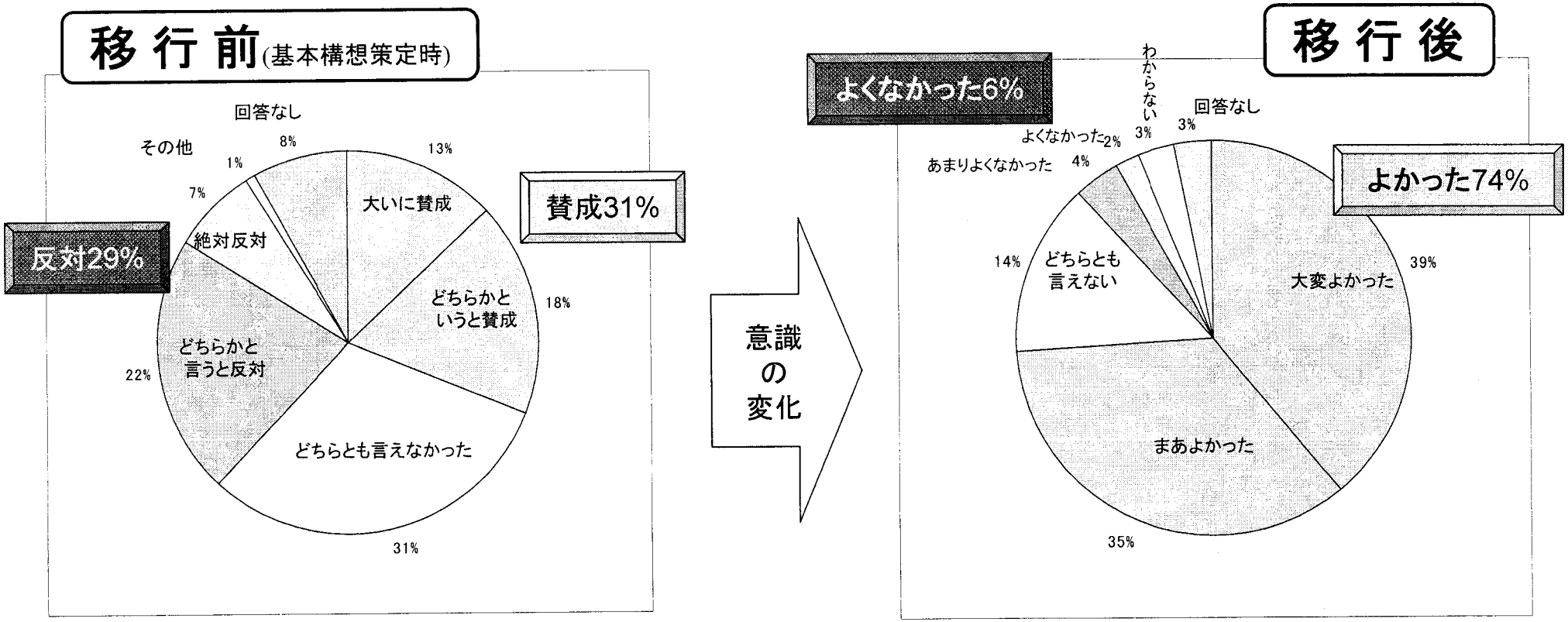
酒岡さんら研究者、大学院生ら五人のチームは今年三月、日本財団の助成金を得て西駒郷地域移行の検証事業に着手。十二月末までに移行者のうち百二十人のホームなどを訪れ、援助者とのかかわりや将来の希望、悩みなどを尋ねてきた。

中には「施設に連れ戻しに来たの」と間違いし目撃に隠れた人もいたが、「結婚したい」「次は一人暮らし」などと夢を語る人も多かった。「息が詰まるよう な集団生活の中で夢を語えるんできた」と検証チームの山梨学院大学講師、竹端寛さん（三）は話す。あきらめや困惑への満足もあった。「花開いたかのように、どっと出てきた」

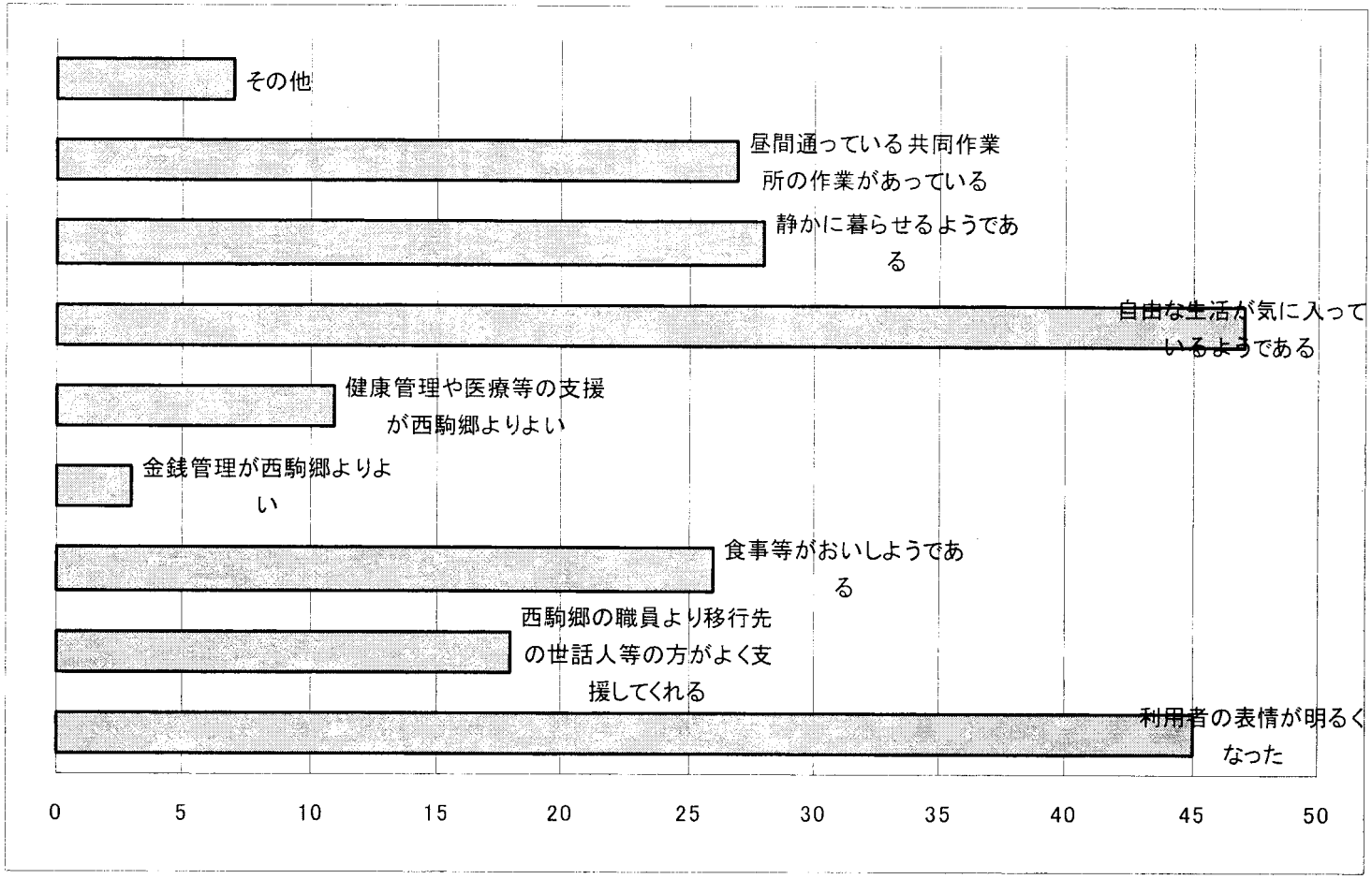
抑え込んできた思い 生き生きと

地域生活移行した方の家族へのアンケート
（長野県西駒郷の地域生活移行の取組から）

実施期間	平成18年2月20日～3月10日
対象者数	地域生活移行した方の家族142人
回答数	95人
方　法	郵送による無記名回答方式



入所施設の生活より、よくなったと感じた理由に該当するもの全てに○をしてください。



長13 くらし 2006年（平成18年）9月28日（木曜日） 信濃毎

くらし ふーん

「西駒郷」から地域移行 家族に調査

7割超「よかった」と回答

目配りや生活費で不安も

「知的障害者が地域で普通の暮らしをすること」を目的に、駒ケ根市、上伊那郡宮田村にある県の知的障害者総合援護施設「西駒郷」（定員五百人）の縮小を進める県障害者自律支援チームは、同所を出て地域生活を始めた人の家族に実施したアンケート調査結果をまとめた。七割超が施設を出て「よかった」としている。

アンケートは、今年二月二十日から三月十日にかけ、西駒郷から地域のグループホームなどに移った人の家族百四十二人に郵送、無記名で実施。九十五人から回答を得た。

地域生活移行を「どのように感じているか」との問いには「大変よかった」39%、「まあよかった」35%で計74%。一方、「よくなかった」「あまりよくなかった」は計6%だった。移行先の地域生活が「よくなったと感じる」家族に理由を尋ねたところ、「自由な生活が気に入っているようである」が47%でトップ。続いて「表情が明るくなった」「静かに暮らせるようである」―の順だった。

一方、県が「脱施設」を促す「西駒郷基本構想」を策定した〇四年三月時点でどう感じていたか、との問いには「大いに賛成だった」「どちらかというと賛成だった」が計31%。「どちらかというと反対だった」「絶対反対だった」が計39%と小差だった。施設を出る」ことに当初、反対だったが、地域移行が実際に始まった後に、賛成に転じた家族も多いことが分かった。

感想として、グループホームでの生活を「イキイキとした様子」「落ち着いてきた」「家に近くなったので時々顔を見に行ける」など、前向きな変化を喜ぶ声も。

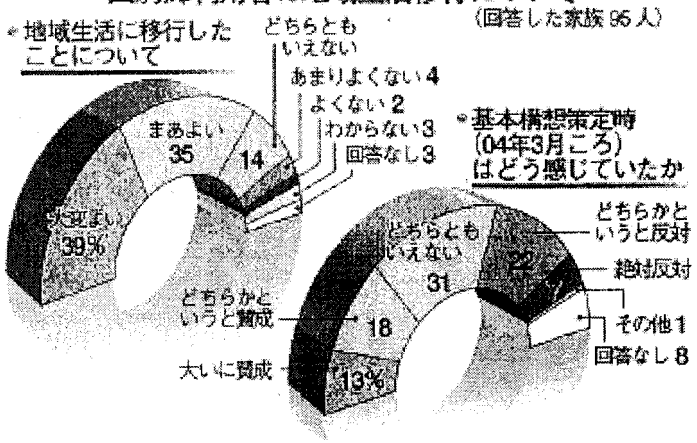
一方、移行先で「十分な目配りができていない」「（近所に）知られてしまうのでつらいこともある」といった声や、「月々の生活費が多くかかる」など経済的な不安も挙がった。

県の基本構想は、〇七年度までに二百五十人の地域生活移行を目標とし、最終的に「六十―百人程度の入所更生施設」を目指す内容。八月時点で百七十九人が地域で暮らしている。

本年度は、基本構想の見直し時期に当たる。県は移行先のグループホームなどで、本人の面接調査を実施。今後、担当課や福祉関係者、

西駒郷利用者の地域生活移行について

（回答した家族95人）



西駒郷からグループホームへ移行した方の経済状況

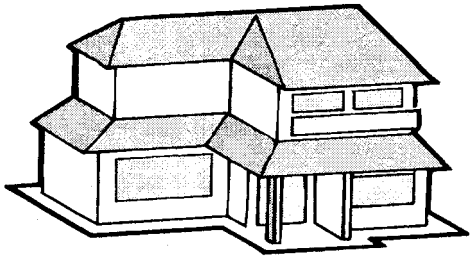
収入平均 90,303円（91,563円）

年金70,705円 ＋ 賃金等19,598円

（71,674円） （19,175円）

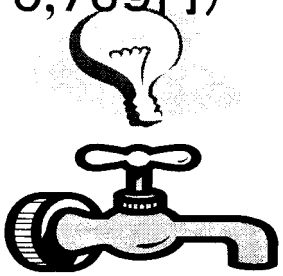
支出平均 48,798円（47,625円）

家賃
15,185円
（15,600円）



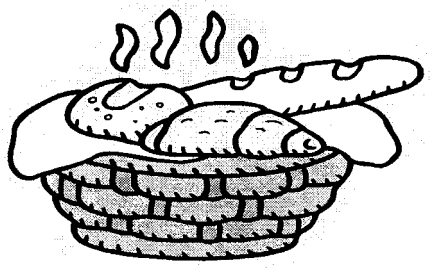
＋

光熱水費
10,913円
（10,739円）



＋

食費
22,700円
（21,286円）



長野県グループホーム実態調査（平成17年2月実施より）

（ ）は県全体の平均

こんな事業あったら・・・

生活の場

・GH、CH利用者との面接を専門に行うケースワーカー設置を
・ファミリーホーム、機能強化型GHを　CHにも強度行動障害加算を
・県住の単身入居促進を　ケアホームの対象に身体障害者を

日中活動の場、就労支援

・企業内授産（施設外授産）経費の助成を
・新事業体系に移行できない施設への支援を
・ひきこもり者に対する就労支援を

相談支援体制

・総合支援センターのコーディネーターが相談できるスーパーバイザーの設置を

その他

・重度障害者に対する支援を
・利用者負担減免を
・遷延性意識障害者に対する支援を
・権利擁護の充実を
・移動支援を